

〈活動報告〉

教育学系と JICA 筑波の国際教育協力

プロジェクトの実績と意義

——平成20・21年度 JICA 集団研修「教員養成課程における
教育改善方法の検討」(中南米地域)——

井 田 仁 康 窪 田 眞 二
清 水 美 憲 田 中 統 治
濱 田 博 文

教育学系と JICA 筑波の国際教育協力プロジェクトの実績と意義

——平成20・21年度 JICA 集団研修「教員養成課程における
教育改善方法の検討」(中南米地域)——

井田 仁 康 窪田 眞 二
清水 美 憲 田 中 統 治
濱 田 博 文

I. はじめに

この報告は、教育学系が、文部科学省大臣官房国際課国際協力政策室海外協力政策係と本学 CRICED(教育開発国際協力研究センター)からの依頼により、JICA 集団研修「教員養成課程における教育改善方法の検討」(中南米地域)に協力して3年間に渡って行っている、国際教育協力プロジェクトの1・2年次の実績報告である。その主な事業内容は、ドミニカ共和国、コロンビア、ボリビア、ホンジュラスの教員養成機関の幹部スタッフ5名を対象に、約1ヶ月に及ぶ研修プログラムを提供するものである。この2年間に行った業務管理報告は次に掲載するが、ここではまず教育学系にとってこの国際教育協力プロジェクトのもつ意義を述べておきたい。

本国際教育協力プロジェクトは、私たちにあって、日本の教員養成課程や教職世界のもつ特徴を相対化して考える契機となっている。とくに、中南米諸国という遠方からの研修生に対して「日本の教育経験をどう再構成して伝えればよいか」という課題は、私たちが日ごろ「自明のこと」としてきた前提を問い直す上で有意義であった。それはスペイン語の通訳を通して間接的にコミュニケーションをとる方法で行われたが、教育用語や専門用語を分かりやすく噛み砕いて説明する作業は通常の教育活動とは異質であるがゆえに、私たちに新たな発見や気づきをもたらした。

報告の後半には浜田教授の講義でなされた質

疑応答を掲載した。そのライブ感が溢れるやり取りから分かることは、異文化理解というより、教師教育という仕事に携わる者同士が共有できる「笑いによる意味理解」である。国際教育協力では、教え学ぶ立場にある者の間にグローバルな連帯感が生み出される。この連帯感こそがこれからの教育学の方向性を暗示しているように思う。陽気で、突然踊り始める中南米の研修生たちの姿が、グローバルな教育世界への新たな希望を感じさせるからである。

II. 平成20年度の活動報告(研修期間:2008年11月17日~2008年12月16日)

(1) コース概要

(a) コースの名称

(和) 教員養成課程における教育改善方法の検討(中南米地域)

(英) Study on Education Improvement of Training Course of Teacher for Latin American Countries

(西) Capacitación colectiva "Estudio del método para la mejora educativa en el curso de capacitación del cuerpo docente para los países latinoamericanos"

(b) 研修期間

・案件全体期間:2008年10月

・本邦研修期間:2008年11月17日(月)~
2008年12月16日(火)

- (c) 定員 5名
- (d) 割当国及び受入国
- ・コロンビア 2名(女性2)
 - ・ホンジュラス 1名(男性)
 - ・ドミニカ共和国 1名(男性)
 - ・ボリビア 1名(女性)
- 計 5名(内訳:女性3名,
男性2名)

(2) コースの背景・目的

(a) コースの背景(以下、JICA作成 General Informationより引用)

中南米地域の基礎教育分野における主要な課題は、「教育へのアクセス向上(量的拡大)」と「教育の質の向上」にある。初等教育の就学率は向上傾向にあり、量的拡大はほぼ克服しつつある。しかしながら、中退率や落第率はいまだ高く、初等教育の「質」については多くの課題を抱えている。現在の学校教育において、教員が果たす役割は大きく、教員の資質が学校教育の質を規定するといっても過言ではない。そのため、教育の質の向上のために、教員の質の向上が求められている。

本研修は、教員養成課程の教育改善を通じて、初等教育の質の向上に資することを目的とする。

日本は教員の質を高めるために、時代に即応した教員像を考慮しつつ、教員養成において教員資格・免許、教員養成課程、教員の待遇などにかかわるさまざまな施策、制度整備、投入を行ってきた。また、日本は教員養成のための授業研究や教材研究などの分野において、独自の取り組みを行っている。本邦研修によって、日本の教員養成の変遷を理解し、教育制度や教育方法を習得することは、自国の教員養成課程の教育改善を進める上で参考となる。

なお、今年度においては教員養成の中でも初等教育を主な研修対象とする。

(b) コースの目的(ねらい)(JICA作成 General Informationより引用)

中南米地域の大学または師範学校における教員養成の質の向上のための改善案を策定し、検討することを目的とする。

(c) 設立年度及び現在までの経緯

本年度(2008年度)が初めての実施であり、2010年度まで計3回実施予定である。通常、教育関係のJICA本邦研修は本学のCRICEDが中心となって受け入れていたが、今回は教育学系が受け入れの中心となった。

(3) コースの到達目標

(a) 上位目標

所属組織において教員養成教育の質の向上のための改善案が実施される。

(b) 研修目標

大学または師範学校において教員養成教育の質の向上のための改善案が策定され、検討される。

上記の目標を達成するため、研修員は自国と日本において：

- ① 自国の教員養成教育や所属組織の教員養成課程の現状・課題を整理する。
- ② 日本の教育概要(歴史、教育行財政、学校制度、教員養成、現職教員研修など)を理解する。
- ③ 日本の教員養成課程について理解する。
- ④ 所属組織における教員養成教育の質の向上のための活動改善案(アクションプラン)、研修レポートを作成する。
- ⑤ 所属組織が情報共有のための機会を設定し、帰国報告会を実施する。
- ⑥ 所属組織が改善案の内容を試行し、その結果を最終報告書として提出する。

(4) 研修実施体制

人間総合科学研究科の井田仁康教授をリーダーとするワーキンググループ(以下WG)を立ち上げ、研修計画を練り上げた。実施に当たってはWGメンバー以外の教育学系教員にも研修講師として多数参加してもらった他、茨城大学、茨城大学附属小学校、つくば市教育委員会、つくば市内公立小学校、日本文教出版(教科書会社)、筑波大学附属小学校等にもご協力頂いた。また、研修の準備段階から本学の卒業生で元青年海外協力隊でもある古川顕さん(補助講師、

サブ講師)に多方面で協力頂いた他、研修中の記録(文書・映像)係として教育学を専攻する本学博士課程の大学院生にも協力してもらった。

(5) 研修の計画内容

(a) 研修概要

本学教員による講義を中心として、発表や討論、見学などを適宜織り交ぜて研修を行なう。

① 講義

本学の教育学系に所属する教員計16名が講師として研修に参加。研修の前半では日本の教育制度や教員養成、カリキュラムなどの全体的な内容を扱い、研修後半は学級経営や個別の教科教育などやや細かい内容を中心に扱う。また、初等教育の教員養成課程を有する茨城大学にご協力頂き、初等教育教員の養成課程の説明を受けるとともに、大学施設の見学を計画した。

② 発表・討論

・第1週目…インセプション・レポート1～3

1. 自国の教育制度について
2. 自国の教員養成課程について
3. 所属組織の現状と課題

これらの発表を通じて、筑波大学側が研修参加国の教育やその課題について認識するとともに、研修員間でも情報を共有する。

・第2週目の終わり(研修半ば)…プログレ

ス・レポート

中間発表。ここでは、約2週間の研修の中で見えてきた新たな課題、あるいは自国で試みたい活動などについて発表してもらい、研修員の興味や方向性を確認する。

・第5週目…インテリム・レポート

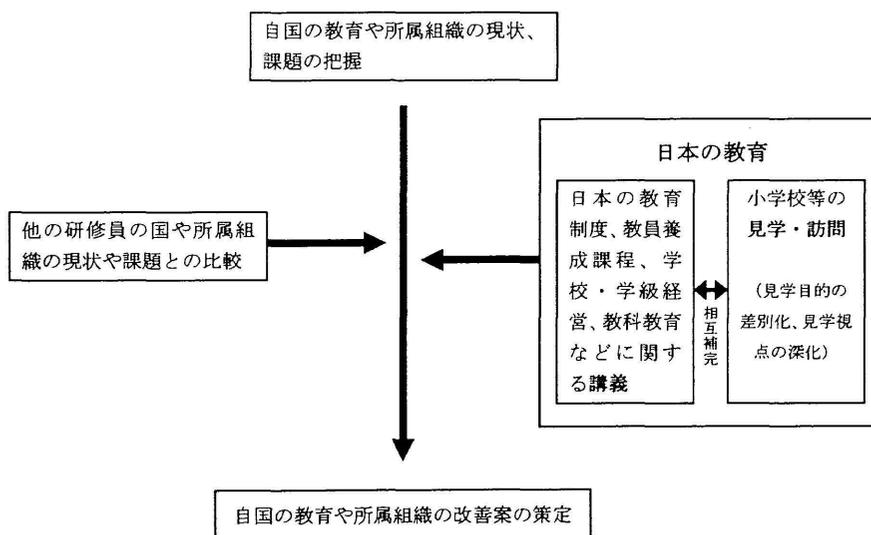
帰国前最後の発表。帰国後のアクションプランについて発表してもらう。

③ 見学・訪問

学校見学の機会が多い方が良く考え、附属小学校2校、つくば市内の公立小学校4校の計6つの小学校の見学、また、学校以外の教育関係機関として、つくば市教育委員会と教科書会社の訪問を企画した。見学先となる6つの小学校では、それぞれの訪問先で異なる研修テーマを設定して見学に深みをもたせた。また、日本の特別活動を体験してもらうために、筑波山、筑波山神社、単位制の学校(廃校利用)などの訪問・見学を計画した。

(b) 研修分野の設定

研修内容は5つの単元(①自国の問題・課題の整理、②日本の教育概要、③日本の教員養成、④日本の指導法と教師の専門教育、⑤改善案の作成)に分類できる。この分類はJICA作成のGIによる。個々の研修内容がどの単元に当てはまるかは、添付したシラバスを参照のこと。



(c) 研修計画の策定

研修全体の流れについてはWGを中心に決定した。当初は、全体のとりまとめを井田教授が、第1・2週目の調整を窪田教授と田中教授が、第3・4週目の調整を濱田教授と清水(美)准教授が行っていたが、内容の入れ替えなどを行う課程でおおよそ以下のような分担となった。

当初の役割の枠組みを基本的には堅持しながら、研修前半の講義に関する調整は窪田眞二教授と田中統治教授が、研修後半の教科教育に関する講義の調整は清水美憲准教授が中心となり行った。また、茨城大学・茨城大学附属小学校及び教科書会社との調整は井田仁康教授が、筑波大学附属小学校との調整は同小学校長でもある塚田泰彦教授が、つくば市教育委員会および公立学校との調整は濱田博文教授が行った。なお、訪問先での具体的な研修内容や配付資料の調整は、古川さんを中心として行った。研修員の歓迎会や次年度以降の研修実施に関する調整は手打明敏教育学系長が行った。

(d) 研修スケジュール

・日程表およびシラバス…添付資料を参照

(6) 研修の実績

(a) 研修日程の変更

研修開始直前になっても11月25日の講義で使用する予定していた映画「二十四の瞳」がスペインから届いていなかったため、念のため12月9日の理科教育の講義と入れ替えを行った。結果的には、研修員が講義で学んだ内容を映画で確認することができて良かったようである。

その他、入れ替え等の大きな変更はないが、研修員からの意見や様子を参考にしながら、日本文化を体験してもらうための民家訪問や居酒屋での歓迎会、谷川彰英副学長との夕食会を開くなど臨機応変に対応した。授業研究に関心が高いことが分かったため、研修の最後に、授業研究の手法を取り入れた大学院生の授業の一部を運よく見学することができたが、非常に好評であった。

(b) 各単元目標の達成度および改善点

1. 単元目標を達成しましたか？

Q1. Have you achieved Expected Module Outputs?

	Fully Achieved 達成		Unachieved 未達成		
	□4	□3	□2	□1	無回答
単元1	2	3			
単元2	3	2			
単元3	5				
単元4	4	1			
単元5	3	2			

(質問票B集計表より引用)

研修員から回収した質問票の回答によると、全ての単元で4ないし3の高い達成度であったことから、研修目標を概ね達成していると考えられる。また、研修講師を担当した筑波大学の教員からも、研修員はとても真面目に研修に取り組んでおり、いい学びの雰囲気を形成している、という声が多数寄せられた。個別の単元については以下の通り。指標として、インセプション・レポート①～③、プロGRESS・レポート、インテリム・レポート(アクションプラン)などの発表、研修員より提出されたデイリー・レポート、及び研修員からの質問等を用いた。

単元①： 自国の問題・課題の整理

主として第1週目に研修員が自国の教育が抱える問題について発表し(インセプション・レポート)、また他の研修員の発表を聞く中で、自国の問題と課題を整理することを期待した。しかし実際には、第2週目以降も、日本の教育を学ぶなかで各研修員が自国の教育を相対化し、自国の教育が抱える問題や課題について理解を深めていると十分推測できる。研修の半ばに、研修員の国あるいは所属機関が抱える問題や課題について再度整理する時間を、もう少し長く設けた方がよかったと思われる。

単元②： 日本の教育概要

本年度は主として初日のオリエンテーションの一部として、サブ講師の古川さんが日本の教

育制度概要を説明した。日本の教育制度について研修員はおおよそ理解してくれたものと推測するが、時間が足りなかったことは否めない。次年度以降は、研修員による発表（インセプション・レポート）を2日目以降に遅らせ、日本の教育制度について説明する講義の時間を十分確保するのが望ましいだろう。

また、日本の教育について説明する際、講義の中で何度も出てきた「学習指導要領」については、具体的な翻訳資料が小学校「外国語活動」というやや特殊な教科しか配布されなかったため、イメージしにくかったようである。

単元③： 日本の教員養成

本研修は、初等教育段階の教員養成課程の質向上を目指すものであったため、初等の教員養成課程を持たない本学での研修に不安はあったものの、研修員の達成度は高かった。初等教育と前期中等教育が一体化していることが多い中南米の状況を考慮し、中学校や高等学校の免許取得についても講義で取り上げたことがよかったようである。しかし、教員養成課程の具体的な履修方法に関しては、理解が難しかったようだ。小学校の教員養成コースでは、幼稚園・中学校・高等学校教諭など、小学校教諭以外の免許と一緒に取得することが一般的であり、理解してもらうにはさらなる工夫が必要と思われる。また、教育職員免許法で定められた科目名（例：「教職に関する科目」、「教職の意義等に関する科目」など）のスペイン語訳が統一されていないことも、理解を妨げる要因の1つと考えられる。

単元④： 日本の指導法と教師の専門教育

第3、4週目の講義を中心に各教科教育あるいは学校経営、学級経営について取り上げた。教科教育に関する講義は、少し細かい話になると予想されたため、どの程度研修員たちが講義についていけるか心配であったが、杞憂に終わった。一般的な教科教育だけでなく、クラブ・委員会活動や遠足、運動会などの特別活動や学級経営の重要性も、講義や見学、映画の鑑賞を通

じて感じ取ってくれたようである。

また、指導法に関しては、筑波大学附属小学校での研究授業の見学（算数）が彼らに与えた影響が特に大きかったようである。この授業をきっかけとして、「授業研究」をぜひ自国に取り入れたいという研修員が続出した。

単元⑤： 改善案の作成

全ての研修員が「授業研究」を中心とする改善案を作成した。みな一定の水準には達していたものの、改善案を導入しようとする際に起こりうる問題の分析が不十分なものが多かったと感じる。さらに良質なものにするためには、改善案の作成途中に経過報告の機会を設け、複数の筑波大学教員が助言するのがよいであろう。ただし、あまり細かい改善案にすると柔軟性が損なわれる可能性もあるので、注意しなければならない。

(7) 研修の評価

(a) 研修員の評価

講義を担当した筑波大学教員による評価は、研修員はみな非常に熱心に取り組んでおり、レベルも高いというものであった。研修員から提出された各種レポートを見ても、総じてしっかりと取り組んだことがうかがえる。

インセプション・レポートは、その形式や内容に大分ばらつきがあった。これは研修員への指示が研修直前になり、また、その指示内容が分かりにくかったという日本側の不手際が原因の一つと考えられる。幸い、発表の中で研修員が口頭で補ってくれたため、大きな問題とはならなかった。3回のインセプション・レポートの発表を通じて、筑波大学側が彼らの国の教育について知るとともに、研修員も周辺国の教育事情を知ることができた。

デイリー・レポートは、学んだことの整理や帰国後に彼らが行う報告の補助、筑波大学側による理解度のチェック等を目的として研修員に課した。研修で学んだことを毎日パワーポイント数枚にまとめ、1週間分を翌週の頭に提出してもらった。レポートは遅滞なく全ての研修員

から提出された。まとめ方や分量は、人それぞれであったが、毎日作成しなければならないというプレッシャーが適度にかかり、研修全体を引き締めるのに役立っていたようである。研修員からのコメントに、講義内容に重複が見られたとあったが、実際には繰り返し説明しても、間違っ理解していることが時々あることを、デイリー・レポートや講義中の質問内容から知ることができた。

研修半ばに作成したプログレス・レポートは、準備時間が不十分であったにも関わらず、研修員は上手くまとめてくれた。この時点で、全ての研修員が特に「授業研究」に興味を持ち、自国での導入を検討していることを明確に知ることができ、その後の指導に有益であった。

帰国直前に発表してもらったアクションプラン（インテリム・レポート）は、①自国の教育が抱える課題、②教員養成課程や現職教員研修の改善計画（自分の職場や職務で可能なもの）、③教員養成課程や現職教員研修の改善計画（自分の職場外で行うもの）、④筑波大学での研修で学んだこと、⑤その他、以上5項目についてまとめるように指示した。実際の発表は、各研修員の職務を強く意識したものとなったものの、聞き手に分かり易くまとめられていた。本研修は、新たに初等教育の教員になることを希望する学生を対象とした教員養成課程の改善を目的として開設されたが、来日した研修員の中には、現職教員研修にしか携わっていない者や中等教育にのみ関わっている者もいた。研修員は各国の代表として日本における研修を受けているので、自分の職務にとらわれない広い視野も持って改善案を作成するように指示したが、難しかったようである。発表された改善策は、いずれも授業研究をその柱とするものであったが、その導入の方法や対象について、それぞれの職務を踏まえた工夫が凝らされており、プログレス・レポートで発表されたものよりも現実性や深みのある内容であった。改善案が細かすぎると、帰国後に案を実施する際の柔軟性に欠けるとも考えられるため、どこまで案を具体化するべきかの判断は難しいところである。しかし、

案を実施するにあたり、誰に働きかける必要があるか、どんな困難が予想されるかといったところまで掘り下げてもらえたら申し分なかった。なお、個々のアクションプランについては、大学院生（補助講師）が作成した記録（添付資料）を参考にさせていただきたい。

(b) 研修の評価

筑波大学の教育学系が今回のような JICA の課題別研修を引き受けるのは初めてであったため、研修実施案の作成段階から悩みの連続であった。初等教育の教員養成課程を持たない本学で、どのような研修を行えば効果があるのかを随分と考えた。最終的には、教育学系に所属する多くの教員に参加してもらい、それぞれの専門性を活かした講義をしてもらうことで、多様なスタッフを抱える本学の特徴を活かした。研修員の反応やコメントをもとに考えると、全体的には充実したよい研修になったと自負している。

研修前半では、日本の教育制度や教員養成、カリキュラムなどに関する講義をし、日本の教育の全体像を掴んでもらった。研修後半は、各教科に関する話など細かい内容を多く扱ったため、研修の目的を見失うのではないかと心配したが、実際には、研修員は自国の問題と結びつけながらそれぞれの講義を聴いており、特に問題はなかった。

初等教育をターゲットとする研修だと聞いていたため、見学した学校は全て小学校であった。附属小学校2校とつくば市立小学校4校の計6校である。また、つくば市教育委員会や都内の教科書会社も訪問した。見学・訪問の質を高めるために、各訪問先との見学内容や配付資料の調整を、古川さんを中心として事前に行った。全体的には、研修前半の見学で、日本の小学校の全体的な様子を捉えてもらうとともに、色々なものを見学させ、疑問を持ってもらった。この疑問をその後の講義で少しずつ解決してもらい、また、講義で学んだことを後半の見学・訪問で確認してもらった。つまり、講義と見学が相互に補完するように配列した。それぞれの訪問先における研修の趣旨は、シラバスを参考に

していただきたい。なお、中南米では日本における小学校と中学校をひとまとめにしていることが多いので、次年度は中学校の見学も1校入れたいと考える。

講義の進め方や資料に関しては、全ての講義に同席した古川さんによると、配布資料は図を使うなどして文字を減らし視覚的に捉えられるようにした方が、理解度が高いことが多く（翻訳精度の問題も関係する）、また、教科に関しては実際に学校で使われている教材を用いて、ある程度彼らが参加できる場を設定した講義が好評だったとのことである。もちろん、研修員のウケがいい講義が必ずしも効果的な講義とは限らない。実際、研修の後半になって、前に受けた講義や見学の意図を理解したという研修員の声を聞くことが何度となくあった。このことから、多様な講義や見学が、有機的に結びついていることが伺える。

今回、研修員の方々を本学に迎えてから気づいたことは、彼らが日本の教育だけでなく、日本人の生活様式や文化に強い興味を持ち、また、彼らの持つ文化を日本に紹介したいという希望を持っていることであった。当初の計画表を見る限り、研修員は1か月もの間、一度も畳に上がる機会すらない。遠い中南米からの研修員に、大学の講義室と小学校しか知らないで帰っていただくのでは、日本文化を理解する機会がなく、日本に研修へ来た意味が薄れると考えた。そこで急遽、学内関係者と調整をし、3つのプログラムを組み込んだ。1つ目は、筑波大学教育学系教員による居酒屋およびカラオケ店での歓迎会である。この歓迎会は手打明敏教育学系長の尽力で実現した。2つ目は、谷川彰英副学長との夕食会である。副学長という忙しい立場にも関わらず、研修員をもてなす席を設定していただいた。そして3つ目は、農村および旧家の訪問である。旧新治村役場近くに住む本学大学院生のご家庭（旧家）にお邪魔させていただいた。これら3つのプログラムを通して、日本人の食生活や生活様式を体験し、また、日本人の人間性を感じていただけたのではないかと思う。もちろん、筑波大学の教員も、彼らとの交流を通

じて学ぶことは多かった。歓迎会などを通じて、お互いを知ることで、両者の距離が縮まり、研修がやりやすくなったと言えるだろう。また、研修員からは、「これらの活動が日本文化を理解するのにどんなに役に立ったことか計り知れない。教育はその国の文化であるから、日本文化を理解しようとせずに、日本の教育を理解することはできない。」という言葉をいただいた。残念ながら、彼らの文化を日本で紹介する機会を設けることはできなかったが、次年度以降は、授業研究の一環として、研修員に国際理解教育の授業を創ってもらい、小学校において日本の子どもを対象とした授業をするのもよいだろう。

(8) 問題点と対応方法

この研修が新規の「教員養成課程(プレ・サービス)」と「現職教員研修(イン・サービス)」のどちらの改善を狙いとしているかが、日本に来る前から分からなかったという声が多く、研修員から寄せられた。既述のように、本学の特徴を活かし、また、今回の多様な研修員に対応するため、大学としてはプレ・サービスとイン・サービス、両方の改善を視野に入れて研修を行った。初日のオリエンテーションなどを通じて、研修の趣旨を大学側からも説明したものの、十分に理解されていなかったようである。研修中は特に混乱した様子は見られなかったものの、最後のインテリム・レポート作成の段階でプレ・サービスとイン・サービスの両方を考慮するように指示を受け、戸惑ったようである。JICAが作成した募集要項(General Information)の日本語版には、プレ・サービスを対象とすると明記してあるものの、研修員が手にしたスペイン語版では、イン・サービスを対象としているとも読みとれる書き方がされていたことも混乱した原因の1つであろう。次年度は、誤解のない翻訳をしていただけたらと思う。

また、彼らの来日直前に指示を出した、インセプション・レポートの作成についても、十分には趣旨が伝わらなかったようだ。各国の研修員の発表内容にばらつきが大きかったことはそのためであろう。今回は3回にインセプシ

ン・レポートを分割したが、大学教員が3回全てに出席することは難しかった。1～2回にすることで大学教員の出席を促し、また、発表ではなくディスカッションの時間を増やした方がよいようだ。

研修全体としては、非常に密度が濃かったが、見方を変えると余裕のない研修となった。1つ目の原因は、宿泊地が全て筑波国際センターであったことである。日本についてもっと知りたいという希望を研修員は抱いているものの、研修プログラムではそのような機会があまり設定されていなかった。そのため、毎週末に研修員の多くは、東京方面へ通っていた。都内のホテルは高額なところが多く、日帰りで何度も出かけていた。平日の朝早くから夕方まで大学において研修を受け、夜はデイリーレポートを作成する。週末は日帰りで東京へ。大学等の管理職である研修員の年齢を考えれば、疲れは溜まる一方であろう。研修員の疲れは、研修の効果にも影響する。附属校の見学日程などを調整することで、週末に彼らが東京に宿泊できるような研修計画を作成できたと思う。また、研修員からの希望が強かった茨城県教育研修センター(笠間市)への訪問も、日本文化を理解するための活動などと組み合わせることで、余裕をもった日程にしたい。余裕がなくなった原因の2つ目は、ディスカッションなど情報整理の時間が少なかったことである。講義資料などを準備しない時間があることは、あまり望ましくないことだと考えていたが、そうではなかったようだ。学校見学の翌日には、見学内容を確認する時間を設けるなど、もっと積極的に質疑応答やディスカッションの時間を設けるべきだと感じた。このような時間が少なかったためであろうか、質疑応答とディスカッションに講義時間のほとんどを使用した教員の評価が非常に高かった。

最後に、研修内容とは直接関係ないが、研修の管理面で苦勞することが多かった。その多くは、JICA と筑波大学の会計基準等の規定の違いによるところが大きい。特に、研修に必要な人員の雇用、学内研修講師への謝金、受入先業務諸費の用途制限については、早急な見直

しが必要であろう。問題は色々あるが、それぞれが自らの規定を押し付けるのではなく、歩み寄ることで、研修に関わるもの皆が納得できるような研修にしたい。

(9) おわりに

今まで教育関係の研修員受入れは本学のCRICEDを通じて行うことが多く、教育学系が中心となって受入れたのは今回が初めてであった。不慣れなため、準備段階から困難の連続であったが、JICA 関係者等の力強いご支援もあり、何とか無事研修を終えることができた。この場をかりて、JICA の甲田さん、藤城さん、菱田さん、JICE の安東さん、通訳の小池さんをはじめ、関係者の皆様に感謝の意を述べたい。特に、古川さんには今回の研修で多大な労力をはらってもらい感謝している。教育学系の教員には、中南米を専門とする者はいなく、受け入れ側が中南米を知る者がいない中で、古川さんの情報は多いに役立ち、研修生に好評な評価を得られたのも、彼の貢献が非常に大きい。苦勞も多かったが、研修員から学ぶことも多く、非常に充実した研修期間であった。次年度も、できるだけ多くの教員に研修に参加してもらい、本学の特徴を最大限に活かした研修をすることで、国際協力に貢献したい。

Ⅲ. 平成21年度活動報告 (2009年10月28日～2009年11月24日)

1. 研修概要

(1) 名称 略

(2) 研修期間

案件全体期間…2009年9月中旬

本邦研修期間…2009年10月28日(水)～2009年11月24日(火)

(3) 研修員人数 5名

・ボリビア 1名(男性1名)

・コロンビア 2名(男性1名,女性1名)

・ドミニカ共和国 2名(女性2名)

計 5名(男性2名,女性3名)

2. 研修内容

- (1) 概念図 平成20年度活動報告 (2)-(c)研修計画の策定 参照
- (2) 日程表【添付】
- (3) 単元目標ごとのカリキュラム構成【添付】

3. 案件目標と単元目標の達成度

(1) 案件目標

日本の教員養成の変遷をその背景と共に理解し、教育制度や教育方法を習得することにより、中南米諸国の教員養成の質の向上を目指し、所属機関にてアクションプランを実施する。尚、本研修は、特に教員養成課程の教育改善を通じて、初等教育の質の向上に資することを目的とする。

指標：単元目標に基づいた講義、実習、学校視察やディスカッションを通じて学び、自国での教員養成の質の向上のためのアプローチ方法を考察する。さらに、日本での研修で得た知識や経験をもとに、自国における教員養成の質の向上のためのアクションプランを作成する。

(2) 単元目標 平成20年度活動報告 (3)-(b)研修目標と同様

達成度：帰国後のファイナルレポートを基に、テレビ会議を行う。その中で、所属組織でのアクションプラン共有や進捗状況、新たな課題、今後の活動について報告を受け、評価を行う。

(3) 達成度測定結果

単元1 自国の教員養成システムの現状と課題の理解

国名	コロンビア	ドミニカ共和国	ボリビア
評価(A~D)	A	B	C

(インセプションレポートを基に評価)

コロンビア…資料が、各テーマ簡潔にまとめられていた。発表時の補足説明も明快であった。ドミニカ共和国…所属組織や業務については詳細な説明がなされたが、課題についてはやや明確さを欠いた部分もみられた。

ボリビア…ちょうど移行期にあたるためか、法律に関する説明が多かった。教員養成システムの説明がやや不十分か。

単元4 アクションプラン

研修員名	P氏	N氏	E氏	D氏	G氏
評価(A~D)	A	A	B	B	B

P氏・N氏…問題や目的、成果とこれからの計画を具体的に挙げる等明確なビジョンを示していた。

E氏…教員評価について方法や内容についても少し具体的な案があるとよい。

D氏…本研修での成果がやや不明確。

G氏…アクションプラン実行の具体的な期間を提示していた。

その他

研修開始直後は、日本のシステムについての理解が難しく、基本的な質問が繰り返された。そのため、講義もなかなか進まない印象を受けた。しかし、研修が進むにつれて、理解を深め更に各自で発展させていく様子が見られ、講師や説明者に対してよりの確な質問をするようになった。特にピエダー氏は熱心に質問をし、非常に積極的であった。また、ドミニカの2人の研修員はお互いに連携し、課題に取り組む様子が見られた。

1. 単元目標を達成しましたか？

Q1. Have you achieved Expected Module Outputs?

	Fully Achieved 達成			Unachieved 未達成	
	4	3	2	1	無回答
単元1	3		2		
単元2	3	2			
単元3	5				
単元4	2	3			

(質問票B集計表より引用)

4. 研修に関する所見

(1) デザイン(研修期間及びカリキュラム構成)

研修期間についてのアンケート結果は、適当であるとの回答がほとんどであった。昨年より若干日数が少なかったが、その分講義を厳選し実施した。訪問先についても、前回の改善点を基に、附属中学校や茨城県教育センター、奈良教育大学を入れる等、幅広く取り入れた。また、全体的に余裕をもって日程を組み、外部訪問の後ディスカッションの時間を設けることで、得られた情報を整理や疑問を解決し、その後の研修日程に活かす事を目指した。更に講義と見学を織り交ぜる事により、相互補完する形にした。

(2) カリキュラム内容・研修教材について

窪田先生の「日本の教員養成システム」の講義は、研修全体のビジョンをつかむことが出来き、その後の日程が理解しやすかったと高評価であった。また、DVDや写真等は視覚に訴えるので、理解に役立ったと思われる。(評価会でもこのような資料を用いた講義は評価が高かった)更に、日本文化に触れることは、日本の教育をより深く理解することにつながると考え、芸道の師範制度や生活様式等を見学する機会を設けた。これにより、日本の子どもたちをとりまく環境や、教師と生徒との間に存在する深い絆について学んで頂けたと思う。

アクションプラン作成のため、今年初めて取り入れたPCM研修は、内容自体は好評であったものの時間が短いとの声が多く寄せられた。実際、手法を学ぶだけで1回目の講義はほぼ終了してしまい、実習の時間がほとんどとれなかった。各自で宿題として問題ツリーを作成するも、理解が十分でないまま作成したため、提出されたものにも修正が必要な点が残っていた。更に、1人で問題分析を行うと広い視野を持つことは難しい。より実効性のあるアクションプランを作成するためには、来日前もしくは帰国後に所属機関等のグループ毎で分析を行った方が、効果的ではないかという意見もきかれた。また、アクションプラン作成の時間も終盤のみとなっていたため、実際に作成段階になっ

たら、テーマを変更する場面もみられた。次回は、中盤に先生方からのコメントやアドバイスをもらう機会をつくり、フォローアップできる時間を設けることが望ましい。

講義資料については、去年の資料の改訂版であったが、翻訳の見直しをして頂いた。翻訳については、校正チェックが出来る人間がいないため定かではないが、講義の様子を見ている分には、さほど大きな問題はなかったように見受けられた。

(3) ファシリテーション

研修員にデイリー・レポートを書いてもらい、通訳の方に翻訳して頂いた。その中で出てきた質問や要望をその後の講義の中で質疑応答の場面に反映させた。

(4) 研修員について

研修員全員が非常に意欲的で、熱心に質問をしている姿が印象的であった。

ただ、当初の予定で割当国となっていたホンジュラスが政変のため来日中止となったのは非常に残念である。予定されていた研修員は、昨年の研修員と同じ所属機関との事で去年の成果を図る意味でも大きな意味を持っていたと思われる。

(5) 研修運営体制

研修運営体制としては、各機関と協力して問題なく終了することが出来た。今回のコースリーダーである清水美憲教授を中心にワーキンググループを立ち上げ、日程や内容に関する打ち合わせを重ねた。また、教育学系の他の先生方にも講義をご担当頂き、アクションプラン発表会へもご参加頂く等、学系全体の協力を得て本研修を行った。

(6) 事前活動

研修開始前に自国の現状把握や課題点、所属組織についての説明をするためのインセプションレポートを作成し、来日前にJICAに提出した。研修開始直後に発表することで、大学の教

員と研修員の間で情報共有を図った。ただ、研修員同士であっても国が異なるとシステムが異なるため、理解するのに時間がかかったように思う。

(7) 事後活動

帰国後に所属組織内でのアクションプランの共有や検討結果を、3月にファイナルレポートとして提出する。その中で、アクションプランの進捗状況や新たな課題や問題点等を報告し、テレビ会議にて説明を行う。

5. 次年度へ向けた改善点及び提案

(1) 評価会における指摘事項

- ・教育研修センターでは、実際に研修を受講した先生からの意見や話を聞く場を設けてほしい。
- ・アクションプランについて、PCM を行って実際に作成する前に見直す機会がほしい。
- ・今回の学校訪問は公立学校のみであったため、私立学校の見学も行い対比することが出来れば尚よかった。
- ・授業参観の教科は、算数(数学)のみであったが、他の教科も見学出来ればよかった。

(2) 次年度以降の改善計画(案)

PCM 研修については、内容は好評であったが、限られた日数の中でどの程度の時間を割くかが課題。また、問題分析や目的分析を行った後に、関係者からのアドバイスやコメントを受ける機会を作る必要がある。アクションプラン作成をもう少し早い時期に一度設けた方が良いという指摘もあったので、上記の PCM 研修に関するコメントと共に中盤に入れるのが有効と考える。

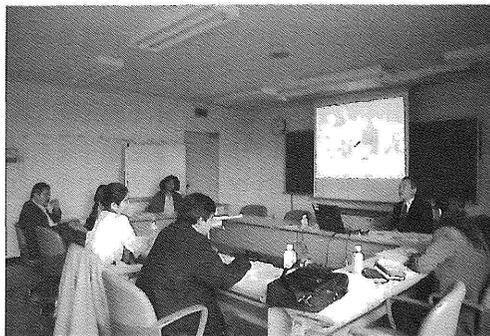
(3) 次年度 GI に反映させる点

現職教員の研修について強い問題意識をもつ研修員がみられたが、本研修の主目的が就職前の教員養成課程を中心とするものであることについて、募集段階で徹底を図る必要があるのではないかと。「教員養成」のスペイン語への訳語に

ついて、十分検討していただきたい。

IV. 研修事例

学級経営と教師の仕事①【11月10日 13:30-16:00】



「小学校の子どもたちの一日」ビデオ鑑賞後の場面より

ピエダー氏(以下ピ) 時間割の作り方に関して、何か基準はあるのでしょうか？私たちの学校では、算数や理科の先生は、子供たちの頭が冴えている午前中にやりたいという要望があります。その辺の時間割の作成にあたってのプライテリアはありますか？

浜 決められている基準はないと思いますが、国家レベルでは、各教科の時間を年間何時間取らなければいけない、というのが決まっています。例えば、算数の時間を一年間140時間取らなければいけない、というルールがあると、学校では、1週間の中で算数を4回入れなければいけない、となります。あとの細かい時間の組み方は、学校によってずいぶん違うかもしれません。ただ、私も日本のある小学校で、同じような話を聞いたことがあります。日本の小学校は、担任の先生が自分のクラスの色々な教科の授業をしますので、ある程度自由に考えることが出来ます。やはり給食を食べた後は、子どもたちは眠くなってしまいう事があるので、給食の後には算数や国語等のような、頭を使う教科はあまり入れないようにする、体育や音楽や図工などを主に入れるという風になりました。

ニーニョ氏(以下ニ) 学校で朝の読書会などは先生が職員室に集まっている間、先生なしで子供たちが自主的に本を読んでいるんでしょうか？

浜 そう…そのようですね。それは不思議ですか？

ピ ええ。とても(笑い)私たちは必ずだれか、教員か大人が子供のところについて見張っているというのが当たり前です。ビデオの中で日本の子どもたちが、本を読んだり掃除をしたり、あるいはクラブ活動を先生がいなくてもやっていたりするのは大変不思議な感じでした。

浜 では、皆さんの国の学校では、教室から先生がいなくなってしまうたら、子どもたちはどんな状態になりますか？

ニ (取っ組み合いのふりをして)こういう状態になります(笑い)

エラーディア(以下エ) 秩序が崩壊しますね。

ニ 飛び上がったたり、物を投げたりとか。

浜 危ないですね(笑い)

ニ そんな感じになりますね。まずは、私たちの国の子どもたちを、先生がいなくても静かにちゃんとできるように変えていきたいです。方法としては、今のビデオをしつこいくらいに見せることですね。今のビデオはもらえますか？(笑い)

ピ 5年生くらいまでは、先生がいなくてもできるとは思いますけれども、やはり思春期に入ってきますと、ちょっと難しいかもしれません(笑い)

浜 今言っておさったように、子供たちが、先生がいなくても静かにしているというところが、実は日本の学校のミステリーなのです。

ダマリス(以下ダ) それはやはり文化なのでしょうか。学校の中だけではなくて、家で両親が働いているのをみたり、大人がいなくてもちゃんとしなければいけないというのがあるからではないでしょうか。

ニ 本当に少し目を離すと、わいわい騒いだり、立ち上がったたりというのが普通ですけれ

ど。

ピ それはあなたが校長をやっているからじゃない？(笑い)

全員 笑い

ピ PTA について伺いたいのですが、日本の PTA は、具体的にどのようなアクティビティをしているのでしょうか？そして、先生方とはどのようなかわりを持っているのでしょうか？また、PTA の代表や役員はどのように選出されるのでしょうか？

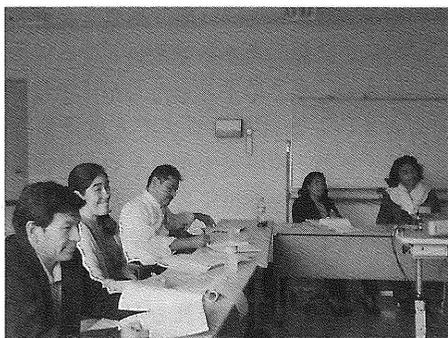
浜 とてもいい質問ですね。PTA というのは、学校の中の正式な組織ではありません。保護者と教職員が合同で作る組織となっています。そして、PTA を持っていない学校もあります。活動の内容や仕方は学校によってかなり違いますが、一般的に PTA の組織というのは、まず会長がいて副会長がいて何人かの役員と呼ばれる人たちがいます。小学校や中学校の場合、普通は学年委員会という同じ学年の保護者と教員の集まりのような部があります。一方で、安全委員会や保健委員会等各種委員会があります。学年委員会というのは、各学級の中から保護者が必ず1人か2人くらい選ばれ、選出された保護者で一つの学年会を形成しています。また、年度初めに子供が学校に行ったときに、保護者会というのがあります。そして、各学級の保護者会で最初にやることは、PTA の委員を決めることです。それから、学年委員会とは別にある各種委員会は、前年の委員会の人たちが募集をして、推薦したり立候補したりします。一般に、会長は全会員で選挙をやって選ぶような形になります。大体最近の PTA というのは、学校の教育活動に色々な形で協力をする、という活動をやっています。ただし、やはり PTA の活動に参加したくないという親が、最近はとても多くなっているようです。だから委員を決めるのがとても難しいというケースがあります。

ピ では、PTA に入ったり学校活動に協力したくない親が増えているという事に関して

は、先生はどのように分析をされていますか？

浜 そうですね。PTAの会長という仕事の一番大事な仕事は、次期会長を決めることだと言われています。私は、親が何らかの形で関わることは、とても大事だと思っていますが、割とこの近くの学校でやられているのは、子供の数に応じて必ず全員が委員をしなければいけない、というルールです。1人の子どもがいる人は、必ず1回委員をしなければいけない、3人子供がいる人は、必ず3回やらなければならない、会長をやれば3回分とカウントしてあげる。こういうルールを決めている学校があります。ちなみに私は子供が3人小学校に通っていた1年間は会長をやりました。

全員 笑い



ピ PTAの総会というのは年に1回ですか？それとも頻繁に行われますか？

浜 総会は1回、年度の初めぐらいに行われます。役員会というのは、月に1回ぐらいの割合です。ですから実際に役員や会長をやる人はとても忙しいです。総会は年に1回ですが、最近多くの学校で行われているのは会議の後に、その学校の校長先生や教頭先生から、学校の教育計画についての説明をして、学校側がその場を使ってPRしたり説明したりするケースが増えています。

学級経営と教師の仕事②【11月11日 13:30-16:00】

つくば市教育委員会の訪問後

ピ なぜ指導主事の先生が3年から5年で変わっていくかというのがわかりました。ずっとやっていたら、本当に気が狂ってしまいますよね。

浜 指導主事の仕事はとても大変な仕事です。なぜかという指導主事になる人は学校の先生になりたい、毎日子供たちと一緒に過ごしたいと思って教師になっています。ところが、学校で一生懸命働いて、子供のためにいい教育実践をした先生が指導主事をやりなさい、という風に言われます。そして、指導主事になったら先程のような市役所のオフィスに自分の机を置かれて、そこで子供が一人もいないところで机に向かって仕事をしなければいけない。計画訪問や要請訪問などで学校へ行っても、自分のことを知っている子供は一人もいません。自分が授業をすることもできないし、子供と遊ぶこともできず、先生の授業を観察して、「机が汚れていないか」とか「危険な場所はないか」という仕事だけをしなければいけない。

ギジェルモ氏(以下ギ) ということは…指導主事になればお給料は増えますよね？

浜 指導主事になっても給料は増えません。もともと学校の教員の給料は、一般の行政職員よりも少し高いのですが、指導主事は学校の教員ではないので、給料は下がります。ですから、給料が良くなくても人のために一生懸命働いてくれて何も文句を言わない人、とてもいい人が指導主事になるわけですね。

ギ でもそれを耐えれば、将来的には校長の席が待っていますよね？

浜 (笑い) せめて、校長先生になって他の先生より少し高い給料がもらえるようにならないと割が合わないでしょうね。

ピ 指導主事の方たちは、色々な学校を見て観察することが出来るので、ゆくゆくは広い視野を持ってものを考えることができます。そういう点はメリットといえますね。

浜 確かにそうだと思います。色々な学校の様子を見ることが出来ますし、色々な先生たちの授業をじかに見ることが出来ます。それが出来るのは、指導主事という立場の人しかいないと思います。ですから、そういう事ができて幸せだな、と思ってくれるような人を選んで、教育委員会は指導主事を決めているのだと僕は思います。(笑い)

不登校に関して

ニ 日本には『字が読めない』という理由で学校に行けない人はいるのでしょうか？

浜 いまですね。

ピ コロンビアの場合でも不登校というのはかなり社会問題になっていて、その原因を分析したことがあります。親が自分が学校へ行くのが嫌だったり、学校で何か失敗をしてしまった経験がある場合、それが子どもにも伝わってしまい、学校へ行かなくなるケースが結構あります。

浜 そういうケースもしかしたら、日本でもあるかもしれませんが…親が学校の先生や学校の事を悪く言っていると、子供も先生や学校に対して不信感を持つたりすることがある。ただ一概には言えないと思います。

ピ 子供がなぜ学校に行くのか。という調査をしましたら、一番は友達を作るため、別に勉強しに行くわけではない。ということで、やはり友達と上手くいかないとなると学校へ行きたくないと思うのかもしれないね。

浜 先程、識字率の話が出ましたが、日本の場合、「識字率」という言葉すら普段使わないくらい、小学校に上がる時点で、文字を読み書きする子どもがたくさんいますし、学校へ通った子どもたちは、ほぼ全て基本的な読み書きというのは出来ますので、単

に勉強が出来ないから学校へ行かない、あるいは行きたくてもお金がないから、といった単純な理由で学校へ行かないという事ではないレベルに達してしまっています。日本もまだ豊かでない時代であれば、学校へ行ったら勉強させてもらえる事をありがたいと思いなさい。と教えられてきたわけですが、学校へ行ったら勉強すること自体は、何のありがたいもない、本当に普通にただ生きていけば学校へ行ったら勉強することが出来る、という状態になってしまったために、逆に勉強できることがありがたいと思えなくなってしまったという事もあるかもしれません。

全員 (笑い)

浜 これはおかしいことかな？ 不思議なことなのかなあ(笑い)

ダ なぜ笑ったかという、あまりにもレベルの違いに驚いたからです。ドミニカの場合は本当に多くの子どもたちが、学校に行けるという事はチャンスだと思っているので、そのチャンスをゲットできれば良い人生を送ることが出来る、教育が受けられるという事をすごく喜びますね。また、そこまで思わなくても、朝食が出る学校であれば、朝ご飯が食べられるだけでラッキーだと学校に行くのですが、日本の場合には全くそういう事がない。ということでギャップに驚きました。

ピ コロンビアも同じで、学校に行けるという事はとても大きなメリットで、学校へ行くこと自体がとてもいいことだと考えられています。

浜 恐らく私が生まれる前、50~60年前の日本の状況はそうだったと思います。

全員 笑い

ダ すごく差がありますね！ただ、私たちは学校に行けるということは本当にいいことだという考えが一般的な中でも、やはり不登校が最近増えてきていまして、学校までは来られるけれども、教室には入れない。教室の窓からのぞいてそのまま逃げてしま



う。また、先生も友達も良くしてイジメもないのに来られない。あるいは家は出たけれども、学校ではなく違うところに行ってしまう。そういう子供が増えていることが問題にはなっています。

浜 まあ私もときどきそういう事をやっていたよ(笑い)

全員 笑い

ピ じゃあ先生は先程の(不登校の)棒グラフの中に入ってらっしゃったんですか(笑い)

全員 笑い

浜 先程のグラフは1990年代ですから、もう私はそれよりもはるかに以前ですから、入る余地はありません(笑い)

ダ 残念ですね(笑い)

浜 でも、日本の50年前位がそうでしたよ、と言いましたが、今は日本の50年前になかった、テレビやパソコン、インターネット、それから恐らくこれからはICT機器なども増えてくるでしょうし、テクノロジーが比べ物にならないくらい進んでいますから、発展の速度、社会の変化の速度ももっともっと早く進むと思います。皆さんの国でも、今の日本の学校と似たような状況は、そう遠くない時期にくるかもしれません。

ダ グローバル化によって、私たちがこうなりましょうという目標をもって、国としても発展していくのではないのでしょうか。

浜 はい。ですから皆さんは、それぞれの国の教育におけるリーダーでありますし、先進国といわれる様な日本の状況の中から、様々な問題点も学ぶことが出来る立場にありますから、是非そういう事をふまえて、

それぞれの国の教育の在り方を考えて頂ければいいと思います。

家庭訪問の様子について

浜 家庭訪問というのも、担任の先生の仕事として、非常に大切な仕事です。最近は学校によってかなり多様になってきましたが、これまで日本の学校では、新年度の初めに、担任の先生がクラスの全ての子どもを訪問して、親と話をするという事が行われてきました。(写真を見ながら)先生と子供とお母さんが話をしています。

ニ ちょうどこの前の居酒屋のような感じですね(笑い)

浜 いや、最近の家に掘りごたつは珍しいですよ(笑い)

ニ 椅子もなく、すごく低い机に心地悪く座るのは、先生に長くいてほしくないからですか(笑い)

全員 笑い

浜 それは…わかりませんが(笑い) まじめな話をすると、大体1件につき10分から15分くらいの時間ですが、クラス全員の家を訪問することによって、子供の通学路や住んでいる周りの環境、同じクラスの子どもと家が近いのかどうかという事がわかります。そして、お父さんやお母さんと少しでも話が出来れば、子供の生活の様子や学習の状況をよりよく理解することが出来ます。このような家庭訪問は、どこでも毎年必ず行われていたのですが、最近では行われない学校も増えてきました。理由は色々ありますが、先生が忙しすぎるということや、両親が仕事していると時間をとるのが難しくなります。また、プライバシーの問題にも敏感になってきたので、学校の先生が家庭の中の状況にまで詳しいという事は良くないという意見も出てきました。ただ、全ての子どもに対しては家庭訪問を行わなくても、例えば先程の不登校の子供や問題を起こしてしまった子どものようなケースは

多くの場合、教師が家まで出かけて行って親と話をするということをします。

小学校の先生の1日について(表を見ながら)

浜 昨日もVTRを見てもらいましたが、ある先生の1日を表にしてみました。小学校の先生は8時位から5時位までが勤務時間ですが、この先生の場合は大体毎日7時15分までには学校に来ていますね。子供の登校時間は8時半までに学校へ来るという事になっています。8時半に朝の会が始まってから、3時半くらいに子供が下校するまでの間は、先生は自由になる時間は全くありません。給食時間も、先生にとってはランチタイムではありません。一緒に食べながら子供たちを指導しています。そして、子供たちが帰ったら、その後様々な先生たち同士の会議や打ち合わせがあります。で、大体5時くらいにようやく自分の仕事が出来ようになります。自分の仕事というのは、明日以降の授業の指導案を作ったり、あるいはテストの採点をしたり、学級便りを書いたりしていると、知らないうちに8時9時になります。

ダ まるで修道院の人か仙人のようですね(笑い)

浜 (笑い)そして、4ページ目にグラフがありますね。教員の勤務時間の調査の結果です。調査の結果、学校で一生懸命仕事をしても終わらないので、ほとんどの先生は持ち帰って仕事をしないと終わらないということがわかります。指導主事の仕事は大変だという話がありましたけれども、こうしてみると学校の先生も実は結構大変ですね。

質疑応答

エ 生徒指導会議というのは、参加するのは教師だけですか？それとも生徒やスクールカウンセラーが参加するのでしょうか？

浜 生徒は入りません。ただ、カウンセラーは

入ると思います。1人1人の子供の個人情報を出す会議ですから、職員以外は絶対入れないです。

エ ということは、何か問題を抱えるクラスの担任の先生が出席し、特に問題がないクラスの先生は出席しなくても良いという事ですか？

浜 そうではなくて、問題を抱えている先生やクラスだけの問題にしないというための会議ですから、自分に問題がないから参加しないというのではなく、問題がなくても他の先生が問題を抱えていれば、みんなで共有してみんなで解決していくための会議です。

ピ コロンビアでは、やはりスクールカウンセラーのような人がいますが、子供の数とカウンセラーの数が合わず、なかなか人数的にまわっていかないということがあります。その場合、近くに保健所のような場所があり、そこで精神的な問題等を抱えている子供たちを含めてサービスを受けていますが、日本の場合はカウンセラーの先生の手には負えないような子どもたちにはどういう対応をしているのでしょうか？

浜 日本でも学校だけで対処できない問題なので、家庭の問題が関わっている場合は、児童相談所が関係していますし、それから教育委員会で話が合った、教育相談センターで対応したり、本当に精神的な問題を抱えてしまうような場合は、病院に連れて行ったり。学校の中だけでは対処できる問題ではないですね。

ピ 生徒指導会議で、問題を起こした子供に対して、制裁というか罰則が必要だとなった時、どういう処分が下されるのでしょうか？

浜 日本の学校、特に義務教育の学校では、子供に対する学校の対応の仕方として懲戒というものが法律で認められてはいますが、しかし現実的には処分といえるものは基本的にはないと言えます。生徒指導会議というのは、悪い事を起こした子供の事を相談

するだけではなくて、精神的に問題を抱えてしまって、例えば友達と上手く関係が作れないとか、授業中我慢できずに廊下に出してしまうとか、子供たち全部を対象にしているの、処分を決めるための会議ではありません。中学校の段階になると、暴力のような事件を起こす生徒もいます。しかし、そういう事件を起こしたとしても、学校はその生徒に停学処分や退学処分にすることはできません。なぜなら、義務教育というのは子供に学校に通う権利を保障している制度です。ですから、学校が学校の権限で子どもに対して「来てはいけない。」というのは制度上不可能です。

ピ ただ、そういう暴力的な生徒というのは、クラスの中でも上手くやっていけないのではないのでしょうか？

浜 上手くやっていけないので、先生たちは大変苦労します。そういう子供たちが、授業中に廊下をうろろしたりすることもあります。その場合、校長先生や教頭先生、教務主任の先生その他空いている先生が廊下を歩きながら、生徒の話を聞いてあげたりします。そのためには、どこのクラスにどんな生徒がいるかを学校の教員全員が知っておく必要があります。生徒指導会議にはそういう意味があります。

ピ 少し前に戻りますが、班活動や係活動は私立の学校でも行われているのでしょうか？

浜 多くの学校で行われています。

ピ 私立でもトイレの掃除をしているのですか？

浜 やっています。

ピ ということは、日本の学校では掃除をする人を雇ったりはしてないのでしょうか？

浜 日本では、学校の教育活動の一環として掃除をするという事が位置づけられています。これはカリキュラムなんです。ですから、人を雇えないから掃除をしているのはありません。

ピ それはすごい事ですね。コロンビアで同じことをしようとしたら、親からトイレ掃除

をさせたという事で裁判を起こされたら、私たちは刑務所に行かなければなりません。

浜 日本では学校の教育活動で当然のように掃除をしていますし、家でもトイレの掃除は毎日誰かがやるし、子供が手伝う事もあります。ですから、トイレを掃除するということが何か罰を受けている、という考え方が必ずしもあるわけではないんです。

V. おわりに

以上の活動報告からわかるように、この国際教育協力プロジェクトは、短期間に集中して各国の教員養成課程の改善アクションプランに役立てられることをねらいとしている。このため、事前の準備のみならず、事後のフォローアップのためのテレビ会議まで続く長期のプロジェクトである。その成果は、20年度の研修生が日本の授業研究に強く関心をもったことに表れており、また、21年度は一部を委託した研修も含めて国別にそれぞれ深い学びがあったようである。この報告の実績を多面的に評価しながら、次年度計画の改良を図っていくことにしたい。

私たちにとって通常の業務に加えてかなりの負担となったことは事実であるが、その業務負担を越えてなお国際教育協力でチームで取り組む意義を実感した。なお、この集団研修のために教育学系の教員チームは、無報酬で協力したことを申し添えておきたい。

(文責：田中統治)

2008年 JICA 本邦研修「教員養成課程における教育改善方法の検討(中南米地域)」スケジュール(筑波大学)

2008年11月13日

		11/13 入国											
		8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	
11/17	月		オリエンテーション(大会議室) 井田、栗田、田中、清水、古川ほか	移動	手打、井田、栗田、田中、清水、古川、平田、早坂ほか 筑波大学附属小学校訪問 田中、栗田、古川、木村、斎藤、大野	移動	移動	発表①:インテリウム・レポート①(大会議室)開講式(大会議室) 栗田、栗田、田中、清水、古川、平田、早坂ほか 移動					
11/18	火		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/19	水		発表②:インテリウム・レポート② B403 WS①: 自国課程の整理 各組の小学校の特色(佐野)	田中、栗田ほか	移動	移動	移動	発表③:インテリウム・レポート③ WS②: 教員養成カリキュラムの毛字ル案作成 田中、栗田ほか					
11/20	木		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/21	金		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/22	土		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/23	日		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/24	月		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/25	火		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/26	水		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/27	木		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/28	金		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/29	土		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
11/30	日		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/1	月		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/2	火		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/3	水		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/4	木		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/5	金		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/6	土		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/7	日		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/8	月		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/9	火		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/10	水		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/11	木		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/12	金		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/13	土		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/14	日		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/15	月		移動	移動	移動	移動	移動	移動					
12/16	火		移動	移動	移動	移動	移動	移動					

発表①: 自国の教育制度について (15分×4人組)
(学校系統、経済教育制度、職業、小中高校カリキュラム等)

発表②: 自国の教員養成について (15分×4人組)
(教員免許法、免許の種類、取得法、教員採用試験、教員養成カリキュラム、教員養成制度の長所・特色・課題)

発表③: 所属組織の現状と課題 (15分×5人)
(所属組織概要(組織図)、担当部署の業務、組織全体の課題、所属部署の課題)

発表④: a. 新たに設けられた自国の教員養成制度の課題、所属組織の課題
b. 教員養成カリキュラムのモデル案?

発表⑤: 所属組織の課題に対する改善案(活動計画の策定)

12/16 空白出席

2009年 JICA 本邦研修「教員養成課程における教育改善方法の検討（中南米地域）」スケジュール（筑波大学）

	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00
10/28 水			開講式/オリエンテーション(大卒・移動)・施設見学 jica施設担当 田中、塚田、清水、大田			昼食	発表①：インゼジョンレポート①(小会議室) 田中、井田、清水、大田				
10/29 木			発表②：インゼジョンレポート② 田中、井田、塚田、大田ほか			食	日本の教員養成システム(教員採用、研修、免許制度) 塚田				
10/30 金			WS①：アクションプラン作成指導(POW) 井田、清水、大田ほか			食	教員養成カリキュラムのミミズプロジェクトとは何か 田中				
10/31 土											
11/1 日											
11/2 月		移動	つくば市立 上郷小学校 訪問、総集 清水、大田、TA2名			移動	訪問後のディスカッション(大卒会議)		清水、塚田、大田ほか		
11/3 祝						食					
11/4 水		移動	WS②アクションプラン作成指導(POW) 井田、塚田、浜田、清水、大田ほか		移動	移動	スクーラーター研修参加者とのディスカッション (大卒会議)		日本の教育制度 清水、(浜田)、大田 古川		
11/5 木		移動	茨城県教育研修センター訪問 田中、大田、TA			食	訪問後のディスカッション 田中、大田、TA		移動		
11/6 金		移動	筑波大学附属中学校訪問 清水、大田、TA2名			食	東京学芸大学訪問(教員養成センター) 清水、大田、TA2名		移動		
11/7 土											
11/8 日											
11/9 月		移動	筑波大学附属小学校 訪問、総集 清水、塚田、坪田、大田、TA2名			移動	教科書会社(東京書籍)訪問 清水、大田、TA2名		移動		
11/10 火			教育委員会と学校経営 大木			食	学級経営と教師の仕事① 浜田				
11/11 水			移動 つくば市教育委員会訪問 浜田、大田、TA2名			食	学級経営と教師の仕事② 塚田				
11/12 木		移動	筑波山巡検(筑波山、筑波山神社、磯校利用)、夜ふら活動の準備について 塚田、大田、TA2名				教科専門カリキュラム、教員養成カリキュラム 新井		移動		
11/13 金			MSCの授業観察(修士棟) 井田、塚田								
11/14 土											
11/15 日											
11/16 月		移動	筑波大学訪問 (暖房検査・人機、文化財教育) 清水、大田			移動	映画「二十四の瞳」にみる、日本の教育 井田、大田ほか				
11/17 火			日本の教科外活動の奨励について 塚田			食	心の教育からの展望と道徳教育 吉田				
11/18 水	8:15～朝の会		つくば市立 二の宮小学校 訪問 井田、大田、TA 2名		移動		WS②：アクションプラン作成② 田中、井田、清水、大田ほか				
11/19 木			WS③：アクションプランの作成① 田中、塚田、清水、大田			食	発表③：アクションプランの発表(大卒会議) 学系教員全員				
11/20 金			発表③：アクションプランの発表(大卒会議) 学系教員全員								
11/21 土											
11/22 日											
11/23 祝											
11/24 火			評価会			意見交換 閉講式	懇別会				
						田中、井田、塚田、坪田、清水、大田ほか					

発表①：自国の教育制度について (15分×4か所)
(学校系医師、教員教育制度、職階、小学校カリキュラム等)

発表②：自国の教員養成について (15分×4か所)
(教員免許法、免許の取得法、教員採用試験、教員養成カリキュラム、教員養成制度の長所・特色・課題)

発表③：所屬組織の課題に対する改善案、活動計画の提示

要日出席